

「一馬、そろそろ配達に行ぐぞ。」

曾祖父の大きな声が響いた。セミの声、白い雲、汗ばんだ身体に吹き抜ける心地よい風を感じながら五歳のぼくは急いで車に飛び乗った。

当時、群馬県に住んでいたぼくが夏休みになると楽しみにしていたこと。それは生まれ故郷の岩手県に帰省し、曾祖父と一緒に米の配達に行くことだった。曾祖父の家は盛岡市内で三代続く米屋。曾祖父は早くに亡くなった曾祖父の父の跡を継ぎ、戦後の食糧難の時代から店番をする曾祖母と二人三脚で頑張ってきたそうだ。

車に乗ってお客さんの注文どおりに米を届ける。一番人気は地元岩手県産のひとめぼれだ。五キロ、十キロ、時には店舗用の注文が入ると数百キロにもなる米袋を積み込み、お客さんのもとへ向かう。ぼくが慎重にピンポンと玄関のチャイムを鳴らすと、

「ご苦労さま。あら、かわいいお手伝いね。」

と、お客さん。そして今でもおぼえているのは、その場にいる全員の満面の笑みだ。その時、ぼくは思った。大好きな米がみんなを幸せな気持ちにするのだと。汗を流しながら重い米を運んでいた曾祖父の日に焼けた顔が思い出される。

あれから八年が経った。元氣だった曾祖父があつという間に肺がんで亡くなったのは六年も前のことだ。三代続いた米屋はやむなく廃業した。跡継ぎがいなかったのも理由の一つだったが、深刻な理由がもう一つあった。曾祖母にぼくは言った。

「ぼく、大人になったら米屋をやりたい。」

曾祖母は、とても残念そうに

「ありがとう。一馬の気持ちはうれしいんだけど、店がどうにもうまくいがねえんだ。」

深刻な理由、それはぼくたち日本人の米離れだった。米食よりパン食、パスタなど洋食が食卓にあがる割合が増えていき、店の売り上げは年々減り、経営が難しくなったことこそ、米屋が廃業に追い込まれた理由だった。

曾祖父の死から、ぼくは大好きな米をもっと好きになるように心がけた。一人一人の心がけて日本の米の消費が上るはずだから。できるだけ朝ごはんも白米を食べ、休日は三食全てが米食になるように母と相談しながら作っている。やはり地元の米は最高においしい。真っ白でつやつやと輝き、研いでいると指先から小気味よいキュッキュツとした音がする。炊き上がった時の立ち上る湯気が食欲をそそる。納豆と卵、白米さえあつたら、ぼくは満足だ。白米だけではなく、おかずと一緒に炊きこむ母のお手製炊きこみご飯も外せない。ぼく自身でも余ったご飯のおいしい食べ方を研究している。家族に人気があるのはキムチチャーハン。とにかく、ぼくの身体は米で成り立っているといっても過言ではない。家族全員でかみしめる地元岩手の米は、ぼくの毎日を支えているのだ。

流通している米には色々な品種があるが、よりバラエティーに富んだ種類の米があつたら、さらに米の消費が上るとぼくは考えている。そう、新しい品種の改良だ。まだまだ先にはなるのだが、ぼくの夢は米の新品種を作り出し、世に送ること。そのために今の自分ができることを精いっぱい頑張っている。

大切な曾祖父との思い出を胸に、これからもぼくは未来の日本の食卓を彩り豊かなバラエティーある米食でみんなの幸せがあふれるものにしていきたいと強く願う。じいちゃん、見ててくれ。日本の米市場をぼくが立て直してみせるぞ。ぼくは夏空を仰いだ。どこからか曾祖父の笑い声が聞こえた気がした。